

### 廃棄物管理の課題や災害時の医療、 地域連携の力を生かしたい



東南アジア・大洋州部  
計画・ASEAN連携課

加納 大道  
KANO Hiromichi

大学院で地質学を学んだ後、JICAに就職。地球環境部、総務部、大洋州広域の廃棄物プロジェクトなどに勤務。イギリスで環境政策を学び、2014年10月から現職。数多くの地域連携プロジェクトを担当。

世界の自然災害の被害者の9割近くが集中するといわれるアジア。大きな自然災害への対応は、被災国のみならず、周辺国による適切な救援が鍵を握る。そうした状況に備えるため、ASEAN地域で災害医療の連携体制構築に取り組んでいるのが加納大道さんだ。

高校の社会科学見学で、青年海外協力隊の訓練所を訪ね、協力隊OBの方々のお話を聞いたのが、国際協力を知ったきっかけです。学生時代にはバックパッカーとして東南アジアや南米を渡り歩き、厳しい環境やそこで生きる人たちに会いました。その経験が元になり、大学院までの専門知識を生かし、途上国と向き合いつつも日本とのつながりがある仕事をしたいと考えました。

JICAに入ってから、OJT後に配属されたのは地球環境部です。ここでは、主に廃棄物管理分野の事業を担当しました。その後、総務部を経て、大洋州の11カ国を対象とした廃棄物管理プロジェクトのコーディネーターとしてサモアに赴任したことが、広域プロジェクトに関わるきっかけになりました。

「ごみを見ればその国の社会が分かる」という言葉を聞いたことがあります。埋め立て地に処分されるごみには、どんな製品が輸入・製造・消費されているのか、その国の経済・社会状況や産業を知るための手掛かりが詰まっています。とても面白いのです。インフラ整備だけでなく、ごみ収集の計画や埋め立て処理技術、住民への啓発などの仕組みやサービスを提供する人材の育成が不可欠なのも、廃棄物管理の課題の特徴です。一方、広域プロジェクトには、経済・社会・環境などの面でよく似た状況にある隣国との学び合いの機会を作る大きな魅力があります。サモアでの勤務後は、廃棄物リサイクルや環境問題の経済

性について研究するためにイギリスに留学して環境政策を学びました。現在は、ASEAN連携に関する仕事をしています。特に力を入れているのが、救急・災害医療に関する広域連携プロジェクトです。JICA内の複数の部署と協力し、ASEAN各国が災害時に連携して医療に対応する能力の向上を目指しています。ASEAN地域で自然災害が発生した際に、各国の災害医療関係者が協力して一人でも多くの命を救うためには、人的ネットワークや、有事に活用できる共通のルール・ツールの整備、日頃からの訓練などが重要です。そうした基盤を整えるため、ASEAN事務局などの関係者と交渉するのが私の役割です。この取り組みを地域でけん引しているのがタイです。JICAが過去、国内の千里救命救急センターの協力を得て実施した研修に参加したタイ保健省の関係者が、日本の災害派遣医療チーム「DMAT」の仕組みをタイに導入しました。DMATは大規模災害の現場に、訓練された医療チームを機動的に派遣する仕組みで、2011年のタイ大洪水の際にはタイ版DMATが活躍しました。そこで、この仕組みを周辺各国にも広げたいと考えたタイの主導で取り組みが始まり、JICAはワークショップ開催や情報収集調査を支援。今年からはASEAN各国を巻き込んだ技術協力プロジェクトが始まります。ASEAN10カ国の救急医療のレベルには

差があり、一部の国には国内の救急医療の水準向上というニーズもあります。ですから、各国の状況を踏まえた上で、地域共通の課題に取り組んでいかなければなりません。ASEANの災害時医療体制の充実には、日本で大災害が発生した際の助けにもなります。複数の国々で取り組む共同プロジェクトでは、互いに競い合い、学び合うことから向上心が生まれます。複数の国をつなげる仕組みづくりは難しいけれども面白さに満ちています。今後さまざまな分野で地域を支える仕組みづくりや、日本と対象地域のパートナーシップの構築に取り組んでいきたいと思えます。



大洋州各国の廃棄物管理従事者と、埋め立て技術に関する現場研修で。後列左から2番目が加納さん



タイの災害医療チームが日本でのDMATコンテストに参加。加納さんは通訳を務めた